

生産者の視点からみた コンテナ育苗の現状と課題

2015年2月17日
有限会社 大坂林業
松村 幹了

会社概要

設立; 1949年4月 大坂林業設立

2001年3月 法人化

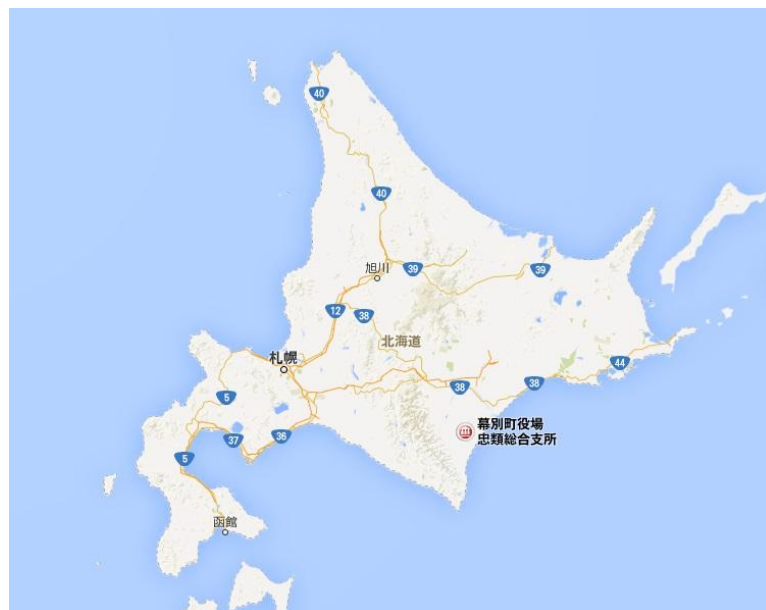
役職員; 4名

作業員; 15名

パート; 5名

苗畑面積; 46ha

苗畑の特徴; カラマツを中心に広葉樹を含めた造林苗木の生産、緑化樹木や組織培養技術を生かした特殊樹木の生産も行う。



生産本数と出荷本数の推移

* 2015年は予想

生産本数	育種区	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
アカエゾマツ		5,000	5,000	5,000	10,000	10,000
トドマツ	東部	5,000	10,000	20,000	30,000	30,000
	中部		10,000	20,000	30,000	30,000
	西南部					10,000
カラマツ			500		13,500	110,000
合 計		10,000	25,500	45,000	83,500	185,000

出荷本数	育種区	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年
アカエゾマツ			3,030	4,400	2,000	8,000
トドマツ	東部		2,000	4,000	14,000	23,000
	中部			4,700	10,000	23,000
	西南部					
カラマツ				250	5,100	70,000
合 計		0	5,030	13,350	31,100	124,000

初期に広まった誤解

- 低コスト造林＝安価な苗

伐採と造林をセットするなど、経費の無駄を省くことで低コスト化

一般的に同じ規格の苗であれば・・・

価格はコンテナ苗＞根巻き苗＞裸苗

例；カラマツH0.50根巻き苗 700円（積算資料H26.3）

- コンテナ育苗は小規模でもできる（裏庭育苗）
→大規模で機械化・省力化・均質化

経緯①

- 2009年11月森林総研の「コンテナ苗に関する意見交換会」に参加
- 2010年より試験栽培
 - 150cc、300ccに植え付け
 - 150ccに直接播種
- 各種研修会に参加
- 2011年1万本生産開始（生産本数倍増計画）
 - 300ccにトドマツ、アカエゾマツ2年生を移植





経緯②

- 2011年9月弊社にて道局帯広事務所勉強会の開催
- 2012年2.5万本作付(生産規模10万本計画)
- 2012年6月弊社にて道局の研修会を開催
- 2012年8月オーストリア圃場視察
- 2012年8月林木育種センターの勉強会に参加 LIECO社社長と意見交換
- 2013年スーパーF1の試験栽培
- 2014年生産規模10万本達成(機械導入)
- 2014年スリットコンテナ導入(カラマツ)



生産方式の変更

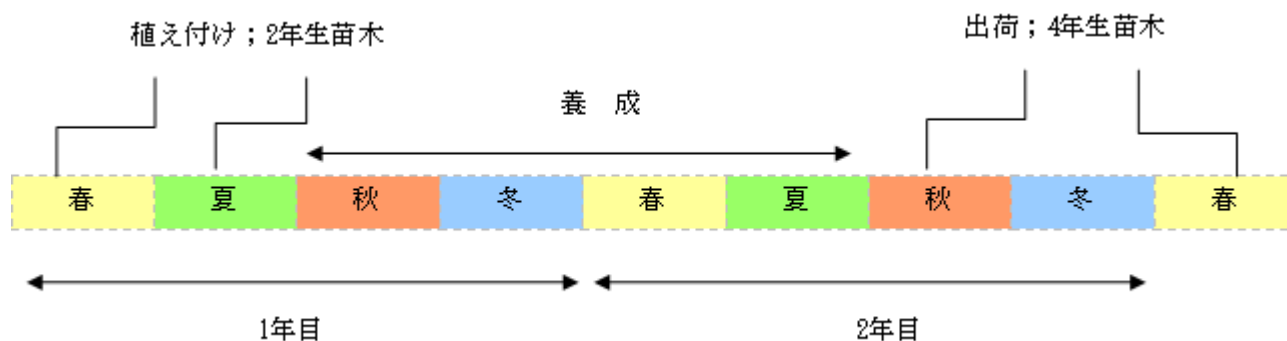
- 2010～2012年と2013年以降では生産方式を大きく変えた



2014年秋出荷では、苗木がよく
なったとの声をいただいています。

生産方法① 養成期間

- アカエゾ・トドマツは300cc
- カラマツ類は150cc
- 養成期間は150ccで1年、300ccで2年
- それ以上の期間養成はせずに残れば廃棄



生産方法② 培土

- 2012年までは、自家配合
道産ピートモス：蝦夷砂：十勝バーク
1 : 2 : 1
- 2013年からは全苗連推薦
の育苗培土を使用



生産方法③ 圃場の配置



生産方法④ 機械化・省力化

- 苗木安定供給推進事業を利用して、培土の充填、穴あけ作業を機械化
 - 培地の充填;ポツティングマシーン
 - 穴あけ作業;ディプラー
- 施設園芸用機械をコンテナ用に調整

培土の充填作業①



培土の充填作業②



培土の植穴状況



生産方法⑤ 管理

- 自動灌水設備(2系統)
- 液肥・殺虫・殺菌剤の散布は適宜
- 冬期の寒害予防; 2013年春に1割強の被害
→発泡材で周囲を囲う
- 除草は適宜

寒害の様子(右半分)



生産方法のまとめ

- 検討事項を少なくして管理に集中
- 歩留まりの上昇
- より大規模な生産に耐えうる生産方式



北海道全体の中長期の計画や方向性の提示が必要

北海道の不利な点(九州と比較して)

- 植栽可能期間が短い(実質8か月未満)
- 林木育種が進んでいない(現状ではコンテナ苗を植えるメリットは活着と初期成長のみ)
- 国有林での取り組み(伐採と植栽の一括発注)が、民有林で再現可能か→低コスト造林となるのか？
- より大きくなるイニシャルコスト(ハウス内栽培、加温・照明を要する栽培サイクル←試験機関の方向性)

コンテナ苗生産について(清水邦夫氏)「むすびに」より
我が国におけるコンテナ苗生産については、その生産技術も含め暗中模索の段階にあるように思われる。～中略～期待が強いだけで、技術が確立されないまま、苗木生産者を含め関係者が右往左往しているのではないか。まずは、優良な苗木を安定して生産できる手法(培地、灌水、肥料等)を確立する必要があるのではないか。

- 生産者として
 - コンテナ苗のメリットを十分発揮できるような苗木作り
 - 生産コストの把握
 - 研究機関との連携
- 北海道型コンテナ苗協議会への要望
 - 中期的な方向性の提示
 - 定期的な意見交換の場の設置